

生態写真活用法と但馬地方の蝶類の課題

渡辺康之

日頃お世話になっている谷角氏より、突然何か原稿を書いて欲しいと言われ、会員ながらも但馬地方とは縁の薄い私は、いったい何を書いてよいのか戸惑っている。私が現在やっているのは、蝶の生態観察と写真の撮影だが、このごろ後者のウェイトがだんだん大きくなってきた。一種の写真中毒症かも知れぬ。おこがましくも昆虫生態写真家などと名乗っているものの、やっていること自体は同好者のそれとほとんど変わらない。今や昆虫の写真に凝る人も少なくないことから、写真をいかにして生態観察に役立てるかを但馬地方の蝶類とその生態一般のことをからめて記してみたい。

1. 写真撮影法

すでに足立義弘氏や谷角氏など、せっせと昆虫写真を撮っておられる方もいる。昆虫写真の撮り方のガイドブックがいくつか出ているので、あまり詳しくは書かない。

まず、1眼レフカメラと焦点距離（以下 $f =$ で表す）50～100mmぐらいのマクロレンズが最低限必要。メーカーはどこのが良いか一概には言えない。蝶の生態写真には $f = 100\text{mm}$ ぐらいのものが一番使いやすい。50mmだとかなり近づかなくては蝶が大きく写らない。

今まで風景や人物くらいしか撮っていなかった人は、初めて何枚か蝶の写真を撮ってみて、ピンボケと手ブレの多さにあきれるだろう。しかし、条件は誰でも同じである。そのうち、いかにしてカメラを固定してブレずに素早くピントを合わせられるかが少しずつ分かってくると思う。それまでは、フィルムの浪費しかありえない。なお、フィルムは一般のネガタイプより、スライド（リバーサル）のほうが後でカラー印刷するときに便利である。

少し慣れてきたら三脚（または一脚）も使おう。また、ストロボも有用ではあるが、補助光ぐらいのつもりで使わないと、ストロボくさいギラギラした写真ばかりになる。とはいえ、私は今でもストロボに頼っているのが現状である。

ストロボは撮影条件がだいたい決まってしまうので、失敗が少ない。あえて言

えば、暗いところではどうしてもバックが黒くなってしまうことである。それでも立体的な幼虫や甲虫を撮るときには大変役に立つ。最近、オリンパスのツインストロボのような接写用ストロボも出ている。

卵の拡大撮影は、ストロボを使ったほうがよい。自然光だとたいてい露光不足になるかブレる。3倍くらいの拡大であれば、ベローズの先に $f = 35 \sim 50\text{mm}$ 位のレンズを逆向き（リバースリング使用）につけ、斜め上からストロボを照射する。だいたい $f 16 \sim 22$ くらいに絞ることになる。このときバックに食草の葉などを入れたり、背景が真っ暗にならないように注意したい。これは、幼虫や成虫などの撮影でも同様である。自然光では少なくとも $1/125$ 秒以上でシャッターを切る必要があり、ストロボでは、カメラを固定し、対象物が動かなければ $1/30$ や $1/15$ 秒でも写せる。ただし野外では風があつたりしてむずかしい。

次に、ひと通りの撮影ができるようになったら、生態観察の手段として、写真を十分に活用しよう。

(a) 生息環境

標準レンズか $f = 28 \sim 35\text{mm}$ の広角レンズがよい。食草を手前に入れたり、成虫が飛んでいるような場所を撮る。毎年同じ場所で撮影しておけば、森林や草原の変遷を知ることができる。季節を変えて撮るのもよいだろう。このごろ、広角や超広角レンズを使い、蝶にぐっと近寄って、周りの環境とともに画面に写し込むことが流行している。うまく撮れると、なかなか見ごたえがあるが、蝶が小さすぎ、環境もあまりよく分からないという中途半端な場合がほとんどであるから、注意が必要である。海野和男氏の写真は超広角レンズを使った例が多い。

(b) 食草、吸蜜植物

本来は、種が不明の植物を標本として持ち帰り同定するものである。しかし、採集禁止地域では不可能だし、いちいち採集するのがめんどろな場合もある。そこで写真に撮り、同定する方法をとる。花や葉がきちんと写っていれば、だいたい同定は可能と考えられる。それでも、イネ科やカヤツリグサ科は似たようなものが多く、困難だ。私は蝶が産卵や吸蜜、幼虫が摂食しているシーンなどのほかに、なるべく植物だけをすぐに写しておくようにしている。

(c) 生態

花だけでなく、獣糞などの汚物で吸汁する蝶も多い。これらを記録として残しておくことも重要である。フィールドノートをまめにつける人はともかく、たいていすぐに忘れてしまう。あとで写真を見て気がつくことも少なくない。



1.構図はよいが蝶にピントが合っていない例（クロアゲハ，1986.11.12，西表島船浦），2.イシガケチョウの卵の拡大撮影例（1985.10.19，石垣島），3.背景が真っ黒になったストロボ写真例（アマミウラナミシジミ，1985.10.24，西表島），4.広角(28mm)レンズの使用例（ヒメギフチョウ，1986.4.30，長野県小谷村）

蝶がただ地上に止まっているのか，あるいは吸水しているのか分からないような場合でも，鮮明な写真が撮れると，ルーペで拡大して確認できることもある。

生態観察で重要なのは，まず採集するということを忘れること。「二兎を追うものは一兎を得ず」の諺通り，どっちつかずはよくない。ネット片手にカメラという人をよく見かけるが，まず良い写真が撮れないはずだ。それから記録をまめにつけること。撮影データは後の参考になるし，観察記録も大切である。

2. 但馬の蝶について

(a) アゲハチョウ科

阪神間では現在，ナガサキアゲハがほぼ定着しつつある。食樹は植栽されたミカン類であることから，山地よりむしろ人家の周辺でよく見られる。但馬地方でも昨年，成虫が得られたそうで，今後定着するのではないか。

ギフチョウは逆に山里の蝶で、瀬戸内側ではごく産地に限られる。内陸部でも産地がいくつか知られるが、高標高地などウスバサイシンやフタバアオイ食いのものがないだろうか。ギフチョウの蛹化場所はまた報告例が少ない。これも産地が近くにあれば、調べるのに便利だと思う。自然状態の幼生期もあまり知られていない。

(b)シロチョウ科

ヒメシロチョウが中国地方にとび離れて分布しているが、但馬地方では可能性が全くないものか。スジグロシロ、エゾスジグロの分布状況もあまり知られていない。後者がどうして偏った分布をするのか分からないことが多い。これは、ヤマキマダラヒカゲ、サトキマダラヒカゲの場合にもあてはまる。

(c)シジミチョウ科

ルミスシジミは無理として、ムラサキツバメはいないものか。阪神間でもまれに迷蝶として採れることがある。ミドリシジミ類ではキリシマミドリが見つからないのが不思議である。ハヤシミドリのようにカシワの分布が限られるものはある程度理解されるのだが、ほかにミヤマカラス、ベニモンカラス（後者は採れたというウワサがある）。キマダラルリツバメは、兵庫県の中部以北に広く分布しているので、例えば温泉町あたりでも見つかるはずである。この蝶は夕方活発に飛ぶので、意外と見落とししやすい。シルビアシジミは私の住む阪神間でも河川敷に棲息している。ふだん虫屋があまり行かないところで、見つかるかも知れない。海岸地域もあまり調べられていない。クロツバメシジミも同様である。

ゴマシジミはまずいと思われるが、ヒメシジミはいてもおかしくない。

(d)タテハチョウ科

全国各地の草原が少なくなり、オオウラギンヒョウモンがずいぶん減った。神鍋高原などのスキー場のようになり、人工的に作られた草地が発生地となっていることが多い。阪神間では、まったく見られなくなったものの一つである。但馬地方ではまだ産地が見つかると思う。このほか、ヒョウモンモドキも兵庫県の産地がほとんど消滅したといわれているが、そんなにすぐに消えるとは思えない。イシガケチョウは兵庫県各地でボツボツと採れているが、定着するまでには至っていない。

(e)マダラチョウ科

アサギマダラは、移動調査がブームとなっている。マーキングの方法など、この際全国的な取りきめが必要である。今は各地でばらばらにやっているのが現状。

また、越冬態についても観察例がほとんどない。

(f) ジャノメチョウ科

クロヒカゲモドキ、キマダラモドキは、全国的にみても分布が局地的である。能勢地方にはかなり普遍的にみられるところもあり、但馬地方でも産地が見つからないものであろうか。ウスイロコノマチョウ、クロコノマチョウはどうであろうか。あまり知られていないが、阪神間の河川敷でウスイロコノマが発生していたことがあった。成虫の記録は各地であり、今後報告されそうな種である。

(g) セセリチョウ科

コキマダラセセリ、スジグロチャバネセセリ、ホシチャバネセセリなど分布の限られる種類の調査が望まれる。また、イチモンジセセリ、チャバネセセリの移動など生態も不明な点が多い。

以上、分布を中心に大ざっぱに述べてみた。兵庫県は氷ノ山（標高1510m）という山地をもち、北は日本海、南は太平洋（瀬戸内海）に面するいわば関所的位置にあるにもかかわらず、中部地方以北と中国地方に飛び離れて分布するヒメシジミやヒメシロチョウ、ウラジャノメといった種類を産しないのは、いったいどういう理由によるものであろうか。まだ未開発の場所が残されているとはいえ、20年前に比べると道路網や林道の発達は見張るものがあり、画期的な新分布は期待できないかもしれない。しかし、たとえ普通種であっても、今まで調査されていない地域での昆虫相の解明を望みたい。

生態面においては、『原色日本蝶類生態図鑑Ⅰ～Ⅳ』（保育社）が最近完結したけれども、どの種をとってみても不明な点が少なくない。わざわざ遠くの産地まで出かけて調べなければならぬ私からみると、フィールドに恵まれた但馬地方はまったくうらやましい限りである。例えば青森県のある同好会では、地元の利を生かして多くの蝶の生態に関する新知見を見出している。

本会の発展を期待するとともに、私もできる限り協力するつもりである。

参考文献（撮影法）

1. 栗林 慧(1978)昆虫写真の撮り方（グリーンブックス(39)），ニュー・サイエンス社，東京。
2. 海野和男(1985)昆虫の撮影法（ネイチャー・フォトグラフィック・シリーズ①），培風館，東京。